令和７年度第２回坂井市総合教育会議 会議録（概要）

日　時：令和７年１２月１７日（水）午後２時００分より３時００分まで
場　所：坂井中学校　１階　会議室

【会議日程】
１　協　議
(1)　第二次坂井市教育振興基本計画（後期）素案について
(2)　坂井市の不登校対策「魅力ある学校づくり」の取り組みについて
(3)　その他

【出席者】
池田禎孝市長、林晃司教育長、橋本明子教育長職務代理者、牧田靖夫委員、
齊藤弘喜委員　宮﨑美恵子委員、光成章探究学習アドバイザー（オンライン）

総務部	奥出部長
教育部	中田部長、半澤次長(教育総務課長)、井尻次長（文化課長）、浦次長（坂井市図書館長）
学校教育課	永田教育審議監、伊東課長、橋本 SOE 推進コーディネーター指導主事
生涯学習スポーツ課	新家課長
丸岡城国宝化推進室	北林室長
事務局書記	松浦補佐、小林補佐

【会議概要】

市　長　（あいさつ）
本日は今年度２回目の総合教育会議となるが、現在進めている教育振興基本計画や不登校対策について、皆様のご意見を伺いたい。坂井市の教育は皆様のおかげで素晴らしい環境である。中学校体育館の空調もほぼ完成し、来年度の夏は快適な環境で部活動ができるようになった。
先日ＰＴＡ連合会との「教育の未来について語る会」では最近のＩＣＴ、ＣＨＡＴ　ＧＴＰなどの話があった。いろんな物事の仕組みスピードが速く子どもたちもついていかないとならない。これも時代のスピードの流れかと感じる。本日はよろしくお願い申し上げる。

市　長　坂井市総合教育会議を開催する。
まず、第二次坂井市教育振興基本計画（後期）素案について議題としたい。

教育総務課長　（資料に沿い説明）

市長　新たに追加してほしい点であるとか、あるいは表現的な質問も含めて、委員の皆様からご発言をお願いしたい。

橋本委員　まずこの基本計画を一通り拝見した。これまでの取組が全体にわたって記載されており、坂井市がこの５年間で実施してきた内容がよく分かるものであった。また、これは子どもに関する施策にも通じると考えるが、誰かと共に立ち止まり、一度振り返る機会を設けることは重要であると考える。

内容について1点質問がある。生涯学習の充実の項目において、「誰もが親しみを持てる図書館を目指すため、読書バリアフリーに取り組む」との記載があった。読書バリアフリーの具体的な内容について理解が十分でないため、具体的な取組等があれば教示いただきたい。

図書館長　読書バリアフリーとは、通常の書籍よりも文字を大きくした大活字本を整備する取組である。視力の低下などにより細かい文字を読むことが難しい利用者であっても、無理なく読書ができるよう配慮したものである。
また、LLブックの整備も含まれる。LLブックとは、知的障害や発達障害等により文章の理解が難しい方に配慮し、やさしい表現や絵、写真等を用いて内容を分かりやすくした書籍である。
そのほか、展示資料の工夫や関連資料の充実を図ることにより、誰もが親しみやすい環境づくりを進めているところである。
以上のような取組を通じて、誰もが読書に親しむことができる環境の整備を図ることを目的として、読書バリアフリーに取り組んでいきたいと考えている。

橋本委員　坂井市にはいくつも図書館があり、すごく活用しやすく便利だと思っている。しかし、来館者数や貸出者数がやや減少傾向にあると計画に記載されており、もったいないと感じた。そこで、以前見た事例として、岐阜市の「みんなの森 ぎふメディアコスモス」が新築したことも要因の一つであると考えられるが、来館者数が約15万人から135万人へと大きく増加した実績がある。その背景には、「賑やかな図書館」というコンセプトがある。従来の図書館は「静かにしなければならない場所」というイメージが強いが、ここではおしゃべりや飲食も可能であり、子どもや家族連れ、友人同士など、これまで利用しづらかった層も来館するようになっている。
一方で、静かに読書や学習を行いたい利用者のためのスペースも確保されており、多様なニーズに対応している点が特徴である。この事例から、何かに取り組む際に「これまでこうであったから」「こうあるべきである」といった固定観念にとらわれすぎないことの重要性を感じた。視点を変え、柔軟な発想で見直すことで、新たな可能性が生まれると考える。今後の取組においても、このような考え方を取り入れることで、さらなる発展につながるのではないかと考える。

市長　次に、斉藤委員お願いします。

齊藤委員　教育振興基本計画について拝見した。その中で、基本計画第三章について、前期の取組を踏まえ、所感を述べる。第三章には「子どもが主役となる事業」や「ICT機器を活用した学びの推進」などが盛り込まれている。この点について、学校訪問時の授業が印象に残っている。体育の授業であったと記憶しているが、「AIスマートコーチ」というアプリが活用されていた。
児童生徒が運動の様子を自ら撮影し、AIから改善点の助言を受ける。それを踏まえて体の使い方を工夫し再度挑戦し、その結果を再び撮影して改善の有無を確認する取組である。
これはPDCAサイクルに近い学びを、子どもたちが体験的に実践しているものといえる。こうした姿を確認できたことは、本市におけるICT活用が効果的に進んでいる表れであると感じた。
今後もこのような取組は積極的に推進すべきである。また、近年はAI活用

が社会的に進展しており、教育分野でも導入が一層進むと考えられる。
その一方で、AI 活用にあたっては、適切な指針やルールづくりの検討も必要である。活用の枠組みを整備することで、より質の高い教育につながると考える。

市長　　何かご意見はあるか。

教育審議監　　斉藤委員から指摘いただいた AI の活用についてであるが、学校現場においては、教員が適切に活用し、教材やプリントの作成等に役立てている状況である。一方で、児童生徒については、使い方を誤ると自ら考える力の低下や、主体的な学びに逆行するおそれもある。そのため、授業中に児童生徒が自由に AI を使用することは基本的に行っておらず、教員が指示のもと、教員用端末や前方の提示装置等を用いて活用している。また、今後の AI や ICT の活用に関しては、本市で策定している ICT 利用に関するルールに基づき、各学校において児童生徒の発達段階に応じた指導が行われている。これらのルールについては、保護者にも周知しており、ホームページ等を通じて内容を確認できるようにしている。

市長　　次に、宮﨑委員お願いします。

宮﨑委員　　教室に入りづらい子どもたちの居場所として、全ての学校に SakAI ルームの設置が整ったことは、大変意義のある取組であると考える。
以前、まだ設置の準備段階であった際に質問をさせていただいたが、対象の児童生徒があった場合に、担当する職員についてどのように配置されるのかを伺ったところ、授業の空き時間のある教員が対応するとの説明であったと記憶しているが、現在においても、そのような体制で運用されているのか。

教育審議監　　SakAI ルームについては、現在も子どもたちが利用し、それぞれがやりたい活動を行う場として機能している状況である。
一方で、教員配置を含めた人的体制については課題があり、すべての学校に専任の担当者を配置するまでには至っていない。現在は、児童生徒数や不登校傾向の児童生徒が多い学校を中心に、人員配置を行っている状況である。
それ以外の学校においても、校内サポートルームを利用する児童生徒がいるため、対応が必要となっている。その場合には、授業の空き時間のある教員が対応する体制を基本としつつ、支援員等も活用しながら対応している。
子どもとの対話や関わりを通じて、少しでも学校に足が向くよう支援を行っているところである。

宮﨑委員　　サポートルームを利用するということは、その児童生徒が何らかの不安や課題を抱えている状況にあるものと考える。そのため、信頼関係の構築が極めて重要であると考える。さまざまな課題があることは承知しているが、将来的には、子どもとの信頼関係の構築に長けた、例えば退職したベテラン教員などが継続的に関わることのできる仕組みづくりができると望ましいと考える。
次に、図書館についてである。外国人住民が増加していく中で、バリアフリーの観点とも関連するが、外国人に配慮した図書の整備や、専用コーナーの設置などについて、現在どのような状況にあるのか伺いたい。

図書館長　　現状としては、大人向けの英語書籍等が十分に整備されている状況ではないと認識している。一方で、丸岡図書館においては、絵本コーナーに英語で書かれた絵本が 20 冊から 30 冊程度配置されている。
近年、外国人利用者も増加していることから、今後は工夫を図る必要があると考えている。常設の外国語図書コーナーの設置が難しい場合であっても、特設コーナーとして紹介するなど、利用者に分かりやすい形で提供する方策について検討していきたい。

市長　　牧田委員お願いします。

牧田委員　　私からは、第 3 章「6-3 スポーツツーリズムの推進による交流人口の拡大」について意見を述べる。2、3 年前に坂井市で開催されたディスクゴルフ国際大会は、小学生も多く参加しており、競技への関心を高める契機になったと思う。
坂井市では市長杯の開催や三国海浜公園のコースを活用した普及活動を継続しており、県内でも貴重な施設であると考えている。また、台湾との交流を通じてディスク競技への関心も広がっていると感じる。
せっかく台湾との国際交流の機会があるので、競技を通じた交流をさらに進めてはどうか。台湾からの受け入れだけでなく、子どもたちを台湾へ派遣し、大会参加や交流の機会を設けることも有効だと思う。
海外で異なる文化や価値観に触れることは、子どもたちの成長に大きな意義がある。私自身も海外派遣の経験を通して考え方が大きく変わったため、ぜひ子どもたちにもそのような機会を与えてほしい。

生涯学習スポーツ課長　　坂井市では、特色ある生涯スポーツとしてフライングディスク競技の振興に取り組んでいる。2012 年に三国海浜公園へコースが整備されて以降、ディスクゴルフやディスクドッヂの普及活動を継続しており、スポーツ推進委員の協力のもと大会運営等も行っている。
また、2023 年にはディスクゴルフの国際大会を開催し、比較的マイナーな競技であってもインバウンドの獲得や交流人口の拡大に寄与することを実感した。こうした実績を踏まえ、10 月には台湾の中高生、12 月には台湾の小学生が坂井市を訪れ、市内の児童生徒とディスク競技を通じた交流を行った。今後もこうした取組を継続していく方針であり、教育振興基本計画にもその方向性を記載している。
さらに、海外からの受入れだけでなく、市内の児童生徒を派遣する双方向の交流も重要であると考えている。英国派遣事業で培ったノウハウを活用しながら、基本計画に基づき事業化を検討していきたい。

市長　　では、光成探究学習アドバイザーご意見お願いしたい。

光成探究学習アドバイザー　　カリキュラム・マネジメントにおいては、教科横断的な学習に加え、学年間の連続性も重要であると考える。中学校では学年間の連携に課題があると聞くが、探究学習の成果を高めるためには、1 年で課題を発見し、2 年で原因分析と解決策の検討、3 年で検証と提案を行うなど、複数年にわたって一つのテーマに取り組む視点が必要である。また、「オンライン縁側」では、教育に関する情報共有や教職員からの相談対応を行い、学校現場への支援を進めている。さらに、生成 AI の登場により、従来の AI が答えを選択するものであったのに対し、新たな答えを創り出す活用へと変化

している。加えて、シビックプライドは単なる郷土への誇りではなく、地域への愛着に基づく当事者意識や主体性を育むものとして捉えるべきである。探究学習を通して、自分たちが将来の坂井市を創っていくという意識を醸成していくことが重要である。現状と理想とする将来像とのギャップが課題であり、その解決に向けては、課題を理解した後に次の段階へ進み、段階的に学びを深めていくことが重要である。また、「オンライン縁側」では、教職員と直接やり取りを行うほか、必要な資料やデータを提供するなどの支援を行っている。さらに、生成AIは答えを選択するのではなく、新たな答えを生み出すことに特徴がある。そのため、シビックプライドの醸成や地域の将来を考える学習においても、有効に活用できると考えている。もちろん、児童生徒による利用については十分な配慮が必要であるが、教員が適切に活用しながら、AIの支援も受けつつ子どもたちが主体的に考える学びを進めていくことが大切であると考えている。

教育審議監　今のシビックプライドについてのご意見を伺い、私も大いに賛同するところである。シビックプライドは、単に地域を誇りに思うだけではなく、子もたちが地域の当事者として主体的に関わっていく意識につながるものであると考えている。そのため、この計画においても、そのような視点がより伝わるよう表現を工夫できればよいと改めて感じた。大変貴重なご意見をいただき、感謝申し上げる。

市長　先生には、先日のPTAとの語る会においても、生成AIを今後どのように活用していくかが大きな課題であるとのお話をいただいた。これはおそらく全国共通のテーマでもあると考えている。今後、先進的な取組事例や有益な情報があれば、ぜひ情報共有をお願いしたい。それでは、教育長から感想や意見をお願いする。

教育長　第二次坂井市教育振興基本計画の策定に当たっては、「子どものための学校づくり」と「学びの主体は子どもである」ということを大前提としている。その考えのもと、今年3月までに市内の小中学生を対象としたアンケート調査を実施し、学校生活や教育に対する思いを把握した。
その結果、最も多かった意見は「友達と楽しく学校生活を送りたい」というものであった。次いで多かったのが、「スポーツや文化活動を通して健康づくりや活力づくりを行い、さまざまな人との交流を深めたい」という意見であった。後期計画の策定に当たっては、こうした子どもたちの思いを少しでも反映できるよう草案作成を進めている。ただし、本計画は前期計画を引き継ぐ後期計画であるため、計画全体の骨格を大きく変更することは難しいが、内容面については子どもたちの思いに沿った形となるよう努めているところである。
一方で、この5年間には新しい学習指導要領が告示され、その内容に基づく教育活動が始まることになる。また、ご意見にもあったように、生成AIをはじめとする技術は急速に発展している。このため、計画期間中であっても見直しや対応が必要となる部分は少なくないと考えている。

今後も社会や教育を取り巻く環境の変化を踏まえながら、必要な内容を柔軟に取り入れ、この５年間の教育施策を進めてまいりたい。引き続き、忌憚のないご意見、ご指導、ご助言を賜るようお願い申し上げる。

市長　　教育に限らず行政全般において、社会の変化は非常に速く、計画策定後も新たな課題や技術への対応が求められる。そのため、必要な部分は柔軟に取り入れていくことが重要であると考える。
また、本計画は子どもたちの視点を大切にし、「学校へ通うことが楽しい」と感じられる環境づくりを進める必要がある。そのことがシビックプライドの醸成や探究的な学びの充実にもつながるものと考える。
なお、本計画については来月にかけてパブリックコメントを実施する予定である。追加の意見等があれば、事務局へお寄せいただきたい。
それでは、次の協議事項である「不登校対策及び魅力ある学校づくり」について、事務局から説明をお願いする。

教育審議監　（資料に沿い説明）

市長　　ご説明ありがとうございました。非常に具体的で分かりやすく、すばらしい取組であると感じた。こうした内容については、PTA をはじめ多くの方々に知っていただくことで、より理解が深まり、さまざまな意見をいただく機会にもつながるのではないかと思う。
それでは、橋本委員から順に、感想やご意見、ご質問等をお願いする。

橋本委員　　魅力ある学校づくりについては、私自身も実践に携わってきた。子どもたちがお互いのよいところを認め合う活動は、実施後の子どもたちの表情も明るくなり、効果的な取組であったと感じている。
一方で、資料にもあるように、こうした取組は成果が見えにくく、手応えを実感しにくい面がある。ポジティブ教育を行ったからといって、すぐに目に見える変化が現れるわけではないが、子どもたちの力になっていればよいと考えながら取り組んできた。
また、低学年で不登校傾向が増加しているとの説明があったが、私が２年生を担任していた際には、「学校へ行きたい」と思える環境づくりを意識し、食育活動に力を入れた。野菜づくりや収穫した野菜の調理、さつまいも料理、おでんづくりなど、子どもたちが楽しみにできる活動を多く取り入れた。子どもたちは些細なことで気持ちが落ち込んだり、学校から心が離れたりすることがある。そのため、日々の学校生活の中で、子どもたちが楽しみや達成感を感じられるようにすることが大切であり、先生方も様々な工夫をされていることと思う。

齊藤委員　　不登校対策についてである。先ほどの説明では、コロナ禍以降に不登校が増加しているとのことであったが、その要因をどのように分析し、それに対して効果的な対策が講じられているのかという点が気になった。
最近、このテーマについて情報収集をしている中で、コロナ禍以降は以前に比べて学校を休むことへの心理的なハードルが低くなったのではないかという意見を見聞きすることがあった。子どもの思いを尊重することは大切であるが、一方で「学校に行きたくなければ無理に行かなくてもよい」という考え方が、不登校増加の一因になっている可能性もあるのではないかと感じている。もちろん、かつてのように無理に登校を促すことが望ましいとは考えていないが、こうした社会や家庭環境の変化も踏まえた対策が必要ではないかと思う。
また、不登校対策に関連して、丸岡中学校で検討されているチーム担任制にも期待している。PTA の立場で説明を聞き、先行事例の資料や映像も確認したが、生徒からは「担任との相性による悩みが軽減され、学校へ行きやすくなった」といった声も見られた。
担任との関係が理由で不登校傾向となる児童生徒もいることから、チーム担任制はそうした状況を改善する有効な取組の一つになり得ると考える。今後の導入や効果検証に期待したい。

宮﨑委員　　学校は、誰もが通うことのできる大切な学びの場であり、子どもが成長していく過程で、人として育つための重要な環境であると考えている。特に、家族以外の大人や友人と関わる経験は、子どもの成長にとって非常に大きな意味を持つ。そのため、「無理に学校へ行かなくてもよい」という考え方だけでは、子どもが成長する貴重な機会を失うことにもつながりかねない。
不登校の問題については、社会全体で真剣に向き合い、改善に向けて取り組む必要があると感じている。学校訪問を通じて、大規模校ほど不登校児童生徒が多い傾向を感じている。また、不登校の増加はコロナ禍と時期を同じくしており、ICT 活用の推進など教育環境の大きな変化の中で、教職員の負担も増加した。その結果、子ども一人一人に寄り添う時間や関わり方に影響が生じた面もあるのではないかと思う。子どもにとって、自分を認めてくれる人がいることや、自分の居場所があると感じられることは非常に重要である。こうした安心感が、学校生活を支える基盤になると考えている。
その点で、丸岡中学校で進められているチーム担任制には大いに期待している。一方で、教職員の負担増加につながるのであれば、学校だけに任せるのではなく、地域の大人の力を活用するなど、多様な支援のあり方も検討していく必要があるのではないかと考えている。

牧田委員　　資料では不登校児童生徒数が年々増加しているとのことであるが、その背景には家庭や社会環境の大きな変化があるのではないかと感じている。

私が子どもだった頃と比べると、現在は虐待やネグレクトといった問題が顕在化しており、また核家族化が進んだことで、家庭の中で子どもを支える大人の存在が少なくなっているように思う。以前は祖父母を含めた家族の中で育ち、生活や仕事の手伝いを通して多くのことを学ぶ機会があったが、そうした環境が減少していることも影響しているのではないかと考える。
民生委員・児童委員として活動した経験の中でも、不登校の要因はさまざまであった。家族との関係がきっかけとなったケースや、保護者自身が不登校経験者であり、その考え方が子どもに影響していると思われるケースもあった。また、長期休業中の生活リズムの乱れから、登校が難しくなるケースも見られた。
一方で、不登校を経験した子どもたちを支援し、成長につなげる取組も各地で行われている。私自身も、特色ある教育活動を行う学校や支援施設の事例を見聞きしてきたが、そのような環境の中で自信を取り戻し、社会の中で活躍している人もいる。
今後も不登校は増加する可能性があるが、学校だけでなく家庭や地域が連携しながら、子どもたちを支える仕組みづくりが重要であると考えている。

市長　　光成アドバイザーご意見お願いしたい。

光成探究学習アドバイザー　私が以前勤めていたフランス系企業に関連して知っている事例であるが、フランスでは義務教育の開始年齢を引き下げている。その背景には、幼児教育を受けた子どもと受けていない子どもとの間に、将来的な成長や社会性に差が見られるという考え方があるとされている。
もし不登校や問題行動の低年齢化と、幼児期の教育・保育との関連性が認められるのであれば、幼保園との連携強化についても検討する価値があるのではないかと思う。現在、学習指導要領の見直しにおいても、幼児教育から高等学校までの連続した学びや連携が重視されており、そうした視点は重要であると考える。
また、学校に行きたいと思える環境をつくるためには、「学校でしかできないこと」「学校でしか聞けない話」があることが大切ではないかと思う。そして、その内容は子ども一人一人によって異なるはずである。
子どもたちが「もっと知りたい」「もっと挑戦したい」「次は何をしたらよいのか」と思えるような学びや体験を提供できれば、学校はより魅力的な場所になるのではないかと感じている。

市長　　そのような視点は大変重要であると感じた。
それでは、この件について教育長からご意見、ご感想をお願いする

教育長　　私が教育長に就任した令和４年度は、不登校児童生徒数がこれまでで最も多い時期であった。そのため、就任以来、不登校対策を最重要課題の一つとして取り組んできたが、現在もなお増加傾向にあり、魅力ある学校づくりやポジティブ教育の取組だけでなく、別の視点からの対応も含めて検討を進めているところである。
不登校の背景や要因は一人一人異なり、中には自宅に閉じこもり、社会との接点を持てなくなっている児童生徒もいる。しかし、そのような状況であっても、学びの機会を失ったまま大人になることは避けなければならない。そのため、学校に限らず、子どもたちが安心して学べる居場所を確保していくことが重要であり、今後は民間の力も含めた多様な支援を活用していきたいと考えている。
また、「学校に行かなくてもよい」という考え方については、学校現場に対し、最初からそのようなメッセージを発するのではなく、まずは子どもに寄り添い、何に困っているのか、何が原因なのかを丁寧に把握し、少しでも学校へ足が向くような支援を行うことが大切であると伝えている。
全国的にも不登校児童生徒数は増加している状況であるが、引き続き一人一人の状況に応じた支援に取り組み、子どもたちが「学校に行ってよかった」と思える坂井市の教育を目指していきたいと考えている。

市長　　私からの感想であるが、皆様と概ね同じ考えである。私たちが育った時代は、学校は必ず通うべき場所であり、保護者も簡単には休ませないという考え方が一般的であった。しかし、現在は家庭環境や保護者の価値観も多様化し、以前とは状況が大きく変化していると感じている。
また、牧田委員からも話があったように、三世代同居の減少や核家族化の進行など、家庭を取り巻く環境の変化も、不登校増加の一因として考えられるのではないかと思う。
一方で、教育長が述べたように、まずは子どもたちが「学校へ行きたい」と思える環境づくりが何より重要である。また、教職員が子どもの立場に立って寄り添いながら関わることで、学校に魅力を感じる子どもたちも増えていくのではないかと思う。
教職員自身が心に余裕を持ち、温かい雰囲気の中で子どもたちと接することも大切であると感じている。現場にはさまざまな課題があると思うが、不登校児童生徒数については可能な限り減少を目指していくことが望ましい。そのためにも、坂井市の教育においては、この問題を重要な課題として位置付けて取り組んでほしいと考えている。
本日協議した内容については、教育振興基本計画に反映できるものは積極的に盛り込んでいただきたいと思う。
これまでの議題も含めて、何かお気づきの点やご意見があればお伺いしたい。

（なし）

そうした課題や気づきは、今後もさまざまな場面で出てくると思う。そのため、引き続き多くの方々のご意見を伺いながら、教育委員会にも届けていただければと思う。
私自身も、本日の委員の皆様のご意見を伺う中で、新たな気づきや学びを得ることができた。このような意見交換の場は大変有意義であると感じている。

それでは、次第の「その他」に移りたいと思う。事務局から何かあるか。

（なし）

光成アドバイザーから何かないか。

光成探究学習アドバイザー　特にない。今後も引き続きよろしくお願いしたい。

市長　先ほどの教育長の話には大変感銘を受けた。特に、子どもたちに対して最初から「無理に学校へ来なくてもよい」というメッセージを発するのではなく、まずは寄り添いながら学校につながる支援を行うことが大切であるという考え方には、私も大いに共感するところである。
コロナ禍以降、そのような風潮が広がっているようにも感じるが、子どもたちが学校とつながり続けられるような取組が重要であると思う。
以上をもって本日の会議を閉会する。